

---

# 遊戯王GX～亡靈を従えし者～

翔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遊戯王GX～亡靈を従えし者～

### 【著者名】

NZマーク

### 【作者名】 翔

### 【あらすじ】

遊戯王GXの世界にアンデット使いで少々訳ありのオリキャラがいたら?という妄想です。

タッグフォースキャラも出す予定です。

この物語にはチートドロー、「都合主義」、原作キャラとの恋愛要素が含まれています。苦手な方は「注意ください」。

## 第一話 入学試験（前書き）

妄想を消化するための一次創作です。

## 第一話 入学試験

「ソーリーが、デュエルアカデミアへの試験場か……」

よつやくこの場に立つことが出来る。

感極まって泣いてしまった。

まあ、泣かないけど。

俺は変わったんだ。

さてと、こんなところで油壺つてないでわざと受付に行へか。

「受験番号一二〇の鳴海遊希です」

「受付時間ギリギリじゃないか。一体どうしたんだい?」

「電車の事故で遅くなりました」

「きみもか。もう一人、遅れてやつてきた子がいてね。今は試験デュエルの真っ最中だよ。きみも早く行くといこう」

「ありがとうございます」

グッ。<sup>。</sup>

試験官は比較的やれしゃつで良かった。

意氣揚々と試験会場に入つてみる。

「食らえ、スカイスクリーパーシュート！」

「おお、やつてるやつてる」

一人しかデュエルをしてないことは、あいつが俺の前にやつてきた奴か。

「……ヒーローか」

「あれ？ さみも受験生？」

俺の呟きで気づいたのか、メガネをかけた受験生らしい奴が話しかけてくる。

無視するのも面倒だし、会話をしてみることにする。

「ああ、俺は鳴海遊希。受験番号は120番だ」

「僕は丸藤翔。受験番号は119番だよ」

筆記は時の運だからな。

負けてもしようがない。

「受験番号120番。鳴海遊希くん」

「あ、俺の番だ」

ちよつとこにタイミングで俺はデュエルフィールドに向かつ。

その途中、わざわざまでデュエルしていた受験生とすれ違つ。

「頑張れよ」

「あ、ああ」

ポンツと俺の肩を叩いて、その受験生は階段を上がつていった。

少々馴れ馴れしいが、悪いやつではなむづだ。

デュエルフィールドに着くと、わざわざの受験生と戦つていた試験官がいた。

「受験番号1-20。鳴海遊希です」

「シーヨール遊希。私はクロノス・デ・メディチ。学校では実技担当最高責任者をやつてルーノです」

なん、だと……。

俺の試験の相手が実技の最高責任者？

ちよつと待つてくれ、実技最高責任者が受験生に負けるとかあつていいのか？

「何を考えてるバーです？」

「い、いえ、何でもあつません」

そうだ。

きっと油断していたに違いない。

「では、早速始めルーノです」

「デュエル！」

クロノス LP 4000

「先攻はもう二ノです」

大人気ない。

まあ、俺の手札的には……つてちょっと待て、これってワンキル狙えるんじやないか？

「さっきから何を考えているかはしりませんが、私はフィールド魔法『歯車街』を発動。さらにカードを一枚伏せて『大嵐』を発動するノーネ！」

この展開は後攻のときにやるべきだろ。

「破壊された『黄金の邪心像』と歯車街の効果で邪神トーケン一体と『テッキから』『古代の機械巨竜』を特殊召喚するノーネ」

邪神トーケン ATK1000 ×2

古代の機械巨竜 ATK3000

何故か、外野からは終わったな、とか残念だったわね、とか聞こえてくるが気にしない。

気になら負けだと思つ。

実際に終わったのは先生だと思つなど。

「さりに、邪神トーケン一体を生贊に捧げて『古代の機械巨人』を召喚するノーネ」

古代の機械巨人 ATK3000

この上なく、先生の顔がエリート面してゐる。

何だかイライラしてきた。

「私はカードを一枚伏せてターンを終了するノーネ」

クロノス LP4000

古代の機械巨竜 ATK3000

古代の機械巨人 ATK3000

魔法・罠カード

一枚

「俺のターン、ドロー！」

これはまずい。

いい意味で不味い。

一度ならず、一度までも最高責任者が負けてしまつてもいいのだろうか？

「どうしたノーネ？」

「あ、いえ、その……」

「どうせ、何をやつても私のアンティーケ・ギアを倒すことは出来ないーノですから」

「…………」

あー駄目だこの先生。

完全に俺のこと見下してゐるよ。

これは不味い。

自分でも沸点抑えられない。

別に倒す必要なんてない

「何ですと？」

「俺は手札から『サイクロン』を発動。伏せカードを破壊

破壊したカードは『聖なるバリア//ラーフォース』だった。

「これは俺のドロー運がよかつたんだな。

サイクロン引いたの今だつたし。

「俺は手札から『スカル・コンダクター』の効果を発動。こいつを墓地に送ることで手札のアンデット族を攻撃力が2000になるよう特殊召喚できる。俺は『疫病狼』を二体、攻撃表示で特殊召喚する」

疫病狼 ATK1000×2

「一体どんなモンスターを出すかと思えば、そんな雑魚モンスターを並べたところで、何が出来ルーノですか？」

「……俺は手札から魔法カード『威圧する魔眼』を一枚発動。こいつは攻撃力が2000以下のアンデット族を選択して発動できる。この効果の対象になつたモンスターは、相手にダイレクトアタックすることが出来る」

「たとえ、その攻撃をしたところで、私のライフは2000ポイント残ルーノですよ」

その過信が命取りになるんだ。

「疫病狼の効果発動。こいつは元々の攻撃力を一倍にする効果を持つている。つまり、疫病狼の攻撃力は今2000ポイント」

疫病狼 ATK2000×2

「ということは……」

よつやく気がついたようだな。

「俺は一体の疫病狼でプレイヤーにダイレクトアタック！」

「マジナマーマーーー？」

一瞬、会場が静かになる。

だが、それもつかの間。

歓声が飛び交った。

グッ。  
トド。

これが俺の望んだ展開。

誰からも見下されない世界。

勝つとは「んなにも素晴らしいものだったか。

「お前、すげいな。あの先生にワントーンキル決めちゃうなんて」

合図は後で連絡されるところ、「家へ帰る」というあの受験生に話しかけられた。

「手札が良かつただけだ

「でも、すげえよ。今度は俺とマコエルしよう！」

すこいこといわれて悪い気はしない。

「アカデミアに行つたら好きなだけデュエルできるんだから、それまで我慢じろ。」

「うえつ、まあいいや。その代わり、アカデミアに行つたら必ずデュエルしてくれよな」

「ああ、分かった。俺は鳴海遊希」

「お前、遊希っていつののか。俺は遊城十代。同じ『ゆづれ』同士仲良くなじむべし」

「ああ、まいじく」

「俺と十代は握手を交わした。

「それじゃ、デュエルアカデミアで会おう。」

ぶんぶんと手を振つて走つていぐ十代を見ながら、俺はデュエルアカデミアの生活に想いをはせた。

## 第一話 入学試験（後書き）

クロノス先生はいつもこんな役回りしかないですが、そのうち活躍の場を作れたらいいなと思ってます。

ライフ4000だとほとんどの攻撃が致命傷になるから困る。

## 第一話 オシリスレッド（前書き）

タイトルと内容が一致しているかどうかは疑問ですが、「一話は」の  
タイトルと決めていたなんです。

## 第一話 オシリスレッド

家に「テューハルアカデミア」の合格通知が来た。

「オシリスレッドか……」

当然と言えば当然。

筆記は良くなかったし。

でも、ワンキルできたから合格ってのも変な話だな。

「」のカードたちがあれば……。

「何、ニヤニヤしてるんだ？」

顔を上げると、十代が俺の「デッキを見て首をかしげていた。

「十代か。いや、ただ決意を新たにしてただけだよ」

「決意？」

「俺が「」の学園で、いや、世界で一番の「テューハリスト」になつて見せると

俺の言葉にキョトンとした様子の十代。

ちゅうと待て。

俺はものす「」へ恥ずかしこ」とを語ったんじゃないのか。

「……あ、いや、今のままでくれ

「すばーじやん！」

「へ？」

「世界一つで」とは、あの「デュエルキング」を超えることだろ？  
それってすばーと思つ

「や、やつかな、ありがと」

まあが、ここまで語ってくれる人間がいるとは思わなかつた。

「だけど、俺も負けないぜ。とりあえず、デュエルしようぜ」

「結局それが言いたかつただけだ」

「まあな」

呆れたよう言つても、まったく態度を変えない十代。

「ここに来るまで、俺の周りにはこんな奴はいなかつたからな。

「アーキ、あ、鳴海くんも一緒なんだ

「きみは丸藤翔、だつたよね」

「うん。僕のことは翔って呼んでよ。アーキもそう呼んでるし」

「俺のことば遊希でいい」

「遊希くんはもう寮に行つた?」

「ああ、一人部屋だつた」

「えー僕たち三人部屋だつたんだけど……」

「俺は元から一人部屋を希望してたからな。その希望が通つたんだ  
う」

その割には三段ベッドだつたんだけど。

「とりあえず、デュエルしに行こうぜ!」

「あ、待つてよ、アーキ」

「十代、走るなって」

「デュエルフィールドに着くと、オベリスクブルーの生徒が二ちら  
を見つけた。

「ここはオシリスレッドのドロップアウトが来るといいじゃないぞ」

「ドロップアウトだと?」

「誰かと思ったら、万丈目さん。クロノス教諭に勝つた110番と  
120番ですよ」

イラッとしたが、結構俺と十代は有名らしい。

万丈目とかいうやつは、偉そつて口を開いた。

「偶然とはいえるのクロノス教諭に勝ったんだ。なかなかの腕前だ」

「実力や」

「俺のは偶然だけどな」

自信満々に答える十代に対し、俺は一応謙遜してみる。

「そこで何をしているの？」

今度は女性の声がした。

一人の女子生徒が歩いてくるのが見えた。

「天上院くん、藤原くん、この学園の厳しさをこのオシリスレッドのドロップアウトに教えてあげよつと思つてね」

「……テメエ、そこまで言つなら俺と『テュエル』… それなら、どっちが強いか白黒つくだろ」

「身の程知らずが、万丈目さんいいつは俺が」

「そもそも、寮で歓迎会が始まる頃よ」

ツインテールの女子生徒がそつと、万丈目たちは引き上げていった。

「万丈目くんたちの挑発に乗らないことね。あいつらとんでもない連中なんだから」

「それには私も同意見よ。坊やたち、『気をつけ』ことね」

坊やつて、一応同じくの年だと思つんだけど。

「忠告ありがと。俺たちもそろそろ寮に戻るよ」

「そうしたほうがいいわ」

俺たちはテューハルフィールドから出る。

「そうそう、あんたたちの名前は？」

俺は振り返つて一人に尋ねる。

「天上院明日香」

「藤原雪乃よ」

髪の長いほうが天上院で、ツインテールが藤原か。

「俺は鳴海遊希」

「俺、遊城十代」

「丸藤翔です」

「じゃあ、また

俺たちはレッド寮に向かつた。

オシリスレッドの歓迎会は、良く言つて質素。

悪く言つと金をかけてない感じがした。

「それでも、学費は払わなくともいいってのが、この学園のいいところだよな」

流石は天下の海馬コーポレーションが運営している学園なだけはある。

荷物を整理して、ベッドに横になる。

オシリスレッドのほうが居心地は良さそうだな。

オベリスクブルーは嫌味な奴が多そただし、ライイエローは知らないけど。

机の上で学園からもひつた端末、PDAが鳴り始めた。

「何だよ、こんな時間に」

メールを開くと、万丈目の取り巻きが画面に映つた。

『ドロップアウトボーイ。午前零時、デュエルフィールドで待つて

いる。互いのベストカードを懸けたアンティルールだ。勇気があるなら来るんだな』

「はあ？」

午前零時に寮から出るのって校則違反じゃないのか？

それにアンティルールもだる。

でもまあ。

「売られたデュエルは買わないとな

もう昔の俺とは違うんだからな。

自分の口元が歪むのが分かった。

時間に合わせて寮を出ると、十代と翔に鉢合せした。

「十代も呼ばれたのか？」

「ああ、そういう遊希もか？」

「俺は万丈目の取り巻きにだけどな

俺たちはデュエルフィールドに向かった。

その途中、翔が弱気なことを言っていたが、十代がデュエルを申

し込まれたら断る理由はないと言つた。

その通りだな。

「デュエルフィールドに着くと、万丈田と取り巻きが待っていた。

「逃げずに来たか。その気概だけは認めてやろう。だが、所詮オシリスレッドがオベリスクブルーに勝つことなどできないだろうがな」「いやいや、言つてないで、デュエルディスクを構える」

「万丈田さん。こいつは俺が」

「ああ、任せる」

十代が万丈田と、俺はその取り巻きとデュエルする」とになった。

「格の違いを教えてやる」

「勝手に言つてろ」

「「デュエル！」」

遊希 LP 4000

取り巻き 1 LP 4000

「俺の先攻。ドロー！」

先攻なら、相手の場を乱す」とも容易い。

「俺は『手札抹殺』を発動する。お互いのプレイヤーは手札を全て捨て、同じ枚数になるようにドローする。俺は五枚捨て、五枚ドロー

一

「よっぽど手札が悪かつたみたいだな」

馬鹿だな、こいつは。

手札抹殺がただの手札交換なわけないだろ！」

「俺は『ゴブリンゾンビ』を守備表示で召喚」

ゴブリンゾンビDEF1050

「ふはははは、そんな雑魚モンスターを出す」としか出来ないか

調子に乗りすぎだろ。

「俺はカードを一枚伏せて、ターンエンダ」

遊希LP4000

ゴブリンゾンビDEF1050

魔法・罠カード

伏せ一枚

十代のほうは、フレイムウイングマンを万丈目に取られてる。

こじは俺が決めないとな。

「俺のターン。俺は手札から『切り込み隊長』を召喚。切り込み隊

長の効果で、さらに切り込み隊長を特殊召喚する

「じゃあ『激流葬』で全部流れてくれ」

「何!? だが、お前もモンスターを破壊している」

だから、なんでこいつ安易な発想しか出来ないかね。

「ゾブリングゾンビは、フィールドから墓地に送られたとき、手札に守備力1200以下のモンスターを手札に加えることが出来る。俺が加えるのはこいつ『ゾンビマスター』」

「くつ、カードを一枚伏せてターンを終了する」

取り巻き1 RP 4000

魔法・罠カード

伏せ一枚

通常召喚を行つたし、特殊召喚できるモンスターもいないみたいだな。

伏せカードは攻撃反応型か、召喚反応型か。

びひひひせよやることには変わらないが。

「俺のターン、ドローー。」

「騒がしいと思つて来てみれば、一体何事かしり?」

「藤原さん……」

取り巻き1が気持ちの悪い笑みを浮かべて、やつてきた藤原を見る。

やれやれ、今はテュエルに集中しろよな。

「念のため、俺はトラップカード『トラップスタン』を発動する。このターン、トラップの効果は無効になる」

「何だと…?」

「そして、俺は手札から永続魔法『ミイラの呼び声』を発動。このカードは一ターンに一度、自分フィールド上にモンスターがないときに効果を発動できる。手札から、アンデット族モンスターを特殊召喚できる。俺が呼び出すのはさつき手札に加えたゾンビマスター」

ゾンビマスター ATK1800

「俺はゾンビマスターの効果を発動。手札のモンスターカード一枚捨てることで、墓地のアンデット族モンスターを特殊召喚できる。俺はもう一体のゾンビマスターを特殊召喚」

これでゾンビマスターが一体並んだ。

だが、これだけじゃないんだ。

「今特殊召喚したゾンビマスターの効果発動。モンスターカードを墓地に送ることで、三体目のゾンビマスターを特殊召喚」

ゾンビマスター ATK1800 × 3

「そして、」三体のゾンビマスターでプレイヤーをダイレクトアタック！』

「うわああああー！？」

三体のゾンビマスターが取り巻き、襲い掛かる。

これはトラウマモノだな。

だが、グッズ。

「もひ、俺たちを見下すのはやめなよ

「う、嘘だ。ヒートであるはずの俺が負けるなんて……

「は？」

「そうだ、偶然だ。偶然勝つたくらいでいい気になるなよ

「はあ……」

こんな奴らばかりなのか、オベリスクブルーは

ひとつ、十代のまゝ終わりが近いか。

「俺の引きぬき跡を呼ぶぜ。ドロー。」

「警備員が来るわ。校則違反で退学になるかも

水を差された十代は、その場から動かないとか言つていたが、俺と翔で無理やりその場から連れ出した。

「ちえ、余計なことしてくれちゃって」

「もう言つたな、十代。退学にはなりたくないだろ?」

「そうだな」

「それでどう? オベリスクブルーの洗礼を受けた感想は?」

「まあまあかな。もう少しやるかと思つてたけど

「確かに。口先だけで、相手の場を警戒しないブレイブングばっかりだし」

「あなたは良かつたかもしれないけど、そつちはアンティルールで大事なカードを取られたかもしれないわよ」

天上院が十代に向かつて言つ。

「いや、今のデュエル、俺の勝ちだぜ」

そう言つて、十代が見せてきたのは『死者蘇生』だった。

十代、フレイムウイングマンは融合召喚でしか召喚できないぞ。

といづのは無料なので言つのはやめた。

「坊や

「俺か？」

藤原が俺に話しかけてきた。

「あなた強いのね」

「そりゃそりゃ。遊希は世界一のデュエリストになるんだもんな」

「十代！？」

人前でそんなこと言つなよ。

ほら、呆れたように俺のこと見てるし。

「世界一、ねえ……。面白いわね。応援してるわよ、坊や

藤原は俺の肩を叩いて、その場から歩いていった。

「珍しい、雪乃が男を認めるなんて」

「そうなのか？」

「ええ、彼女、他人を寄せ付けないから」

「ふーん」

俺は藤原の背を見送った。

天上院もそのあとを追うように走っていった。

俺たち男三人組は、デュエル談義をしながら寮に戻った。

寮に帰つたのは、明け方くらいだったけど。

## 第一話 オシリス・レッド（後書き）

一話のあとがきでも書きましたが、ライフ4000はもつこ。いろんな意味で。

この主人公の性格とか過去が安定しない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4899ba/>

遊戯王GX～亡靈を従えし者～

2012年1月13日16時57分発行